

「恵方」は、北北西？

JJ1SXA 池

今日は、2月4日の日曜日、昨夜は小平のローヤルホストで、毎月第1土曜日のアイボール会がありましたが、節分の「豆蒔き」と「恵方巻き」の話題が出ていました。

田舎にいた頃は、「豆蒔き」は当然の行事として、いろいろの思い出がありますが、都会暮らしになってからは、そんな行事とはとんと縁が無くなり、芸能人たちがテレビで行うパフォーマンスといったような感覚の日常です。

「恵方巻き」の事は近年知ったのですが、いわれや、いつ頃のものが等という知識は皆無に近く、コンビニで得た知識は、「北北西の方角を向いて、願い事を心中に、無言で1本丸かじりする」のだけといった程度。

実際に、家で「豆蒔き」をやったり、「恵方巻き」を食べている方たちに聞いても、「昔からあった風習でしょう、北北西の方角は、今年の縁起の良い方角だそうです」といった程度の説明しかしてくれず、もう少し詳しく知りたいと思い調べてみました。

節分については、高校時代に国語の教師から教わったので、そのときの話を鵜呑みで覚えています。

教師の話・・・現在は節分というと、立春の前日を指すようになったが、節分とは、日本にある四季、春夏秋冬の季節の分かれ目をいうのだ、だから、節分は、1年に4回あることを覚えておけ、なぜ、立春の前日だけが取り上げられるようになったかと言うと、立春を新年と考えれば、その前日は、大晦日にあたるので、色々な行事で、前年の邪気を祓うという風習ができあがり、節分と言えば、立春の前日と言うことになったのだ。・・・結構偉そうな言葉での授業だったが、この時は何故か神妙に聞いたことを思い出します（普段は、教師の話等には耳を傾けず、こっそり小説を読みふけったり、他の事をしていた不真面目生徒だったのだが・・・、それと温暖化で四季も怪しい！）

まあ、このくらいの知識で、節分については、そう間違っただけではありませんでした、またその時に聞いた、「ついなの行事」という言葉も脳裏にあったので、これも調べて見ました、「豆蒔き」も追儼（ついな）の行事の一つでした。

追儼とは、悪鬼・疫癘（えきれい・・・流行病）を追い払う行事のことで、平安時代、陰陽師たちにより宮中において大晦日に盛大に行われ、その後、諸国の社寺でも行われるようになったとのことで、古く中国に始まり、日本へは文武天皇の頃に伝わったといわれています。

「福は内」「鬼は外」と大まじめで「豆蒔き」をした父親が、次はお前の番だと引継ぎをして「豆蒔き」をしたのは、もう60年以上も昔の幼少の頃、一般的には、「豆蒔き」は年男、または、一家の主人が、煎った大豆をまき、家族は自分の歳の数だけ豆を食べるとその年は、病気にならず長生きすると言われていました。

福は内へ呼び込むのは当たり前だが、外へ追い出すのは何故鬼なのか？何故豆

を使うのか？

いろいろな説はあるようですが、昔の中国の道教の教えで、冥府の神として信仰されていた「秦山府君」が住むと言われていた山が北東にあったことから、冥府→北東→鬼門といわれています。

鬼門の方角は十二支では、丑寅の方角に当り、だから鬼の姿は、牛の角をもち、虎柄の褌(パンツ)を身に付けているのだと・・・。

また、丑というのは12月を、寅は1月を指していて、ちょうど12月から1月にかけての季節の節目に「鬼門」があり、鬼門は鬼の出入りする方角でもあり、この邪気を祓うことにより、春が無事に迎えられると考えられていたようです。

陰陽五行の法則では、自然の道理を木、火、土、金、水の五元素の事を表しており、この「金」というのが、硬いとか、厄病という意味があるので鬼の象徴となり、鬼が金棒を持っているのもこの「金」の象徴のようです。

この「金」の作用をなくすのが、五行では「火」であり、大豆というのは、とても硬いという事で、「金」に当り、イコール鬼です、これを火で煎る(火が金を溶かすという火剋金の作用)と同時に、豆蒔きで外や内にこの大豆がばらまかれて結局、人間が食べてしまうことにより、鬼を退治することになるのだと。

また、豆を蒔く事により、五行の「木」を助けるという事で、「春の気を助ける」から「春を呼ぶ行事」でもあるとのこと、これで、煎った豆で、「鬼は外」になるのです、よくわかりました。

角を生やし、虎柄の褌を身に付け、金棒を持っている鬼の姿は、マンガの世界の創造では無く、ちゃんと根拠があったのですね・・・目からうろこでした。

「鬼に金棒」という言葉(ただでさえ強い鬼に金棒を持たせる意から→強いものが更に強さを加えること)がありますが、鬼に金棒は必需品だったのです。

もう一つの「恵方巻き」、その歴史を見ると、1932年に大阪鮮商組合が、「恵方に向けて無言で壺本の巻寿司を丸かぶりすれば其の年は幸運に恵まれる」と書いたチラシを寿司屋に海苔を納める時に配ったそうで、「節分の日丸かぶり」という風習は、古くから花柳界には伝えられていたようです)、その後、1977年に海苔業界による街頭イベント「海苔祭り」が大阪・道頓堀で開催され、「節分の丸かぶり」を取り入れた「巻き寿司早食い競争」が行われ、これがマスコミに取り上げられて全国に知れ渡ったのをきっかけに、全国主要都市の「海苔祭り」でも宣伝されるようになっていき、1989年に広島のスズキが「恵方巻き」の販売開始、翌年より販売エリアが広がり、1995年には関西以西の地区、1998年には全国エリアで販売するようになったようで、今や、完全に全国区で広く知れ渡った「恵方巻き」は、スズキの関わりが大きいようです。

「恵方巻き」の名のとおり、巻き寿司ですが、巻き寿司を使う理由は、「福を巻き込む」からで、また、丸ごと食べるのは、「縁を切らないために包丁を入れない」という事のように。(福を内に取り込んだら、絶対逃すものか、縁が切れないようにするんだという強いメッセージです)

さて、恵方ですが、恵方とは陰陽道で、その年の干支に基づいて、めでたいと定められた方角の事を表すようです。

2007年の最大の吉方位である恵方は壬(みずのえ)の方位ですが、またまた壬の方位とは、?ですが、しばしば北微西(きた・びせい)とも書かれています。

最大の吉方位というのは「恵方(えほう)」と呼ばれる歳徳神(としとくじん)のいる方角との事で、恵方はその年の十干により決まり、年々変わっていきます。

今年の吉方位は、一般的には、北北西の方角といわれますが、北北西というのは西洋式の16分割した方位の名称であり、それに対して恵方をいう時の方位は中国式の24分割した方角ですので、壬の方位と北北西は少しずれています、では、どのくらいずれているのかと、調べてみました。

北北西は、337.5度です、これに対し、壬の方位の中心点はこれより北へ、2.625度寄った、340.125度です。

しかし、中心点と書いたとおり、壬の方位は、330度~352.5度の範囲のようですから、この中には、北北西 337.5度が入ってきます、「恵方巻き」を食べる時、磁石等を使って方角を正確に調べる方、北北西 337.5度では無く、壬の方位 340.125度を割り出してください(今年は終わったので、来年は、恵方は何度になるか良く調べてビームを合わせましょう・・・)、私のように、ほぼこちらだろうと、いい加減に見当をつけるだけの者には、北北西に近ければ、大体壬の方位の範囲に入りそうです。

ここに書いたことは、そんなことは常識だといわれる方もいることではと思いますが、私にとっては新知識、うれしくなって記事にしました。

間もなく、バレンタインデーがやってきます(この記事が届く頃は、もうホワイトデー)、「恵方巻き」も「チョコレート」も、寿司業界・海苔業界、菓子業界等の大手企業の商魂・商戦で広まり、逆に、それに乗せられて、流行に乗り遅れないようにする一般消費者が、これらの業界を支えていることを再認識ですが、いずれにしても、扱っている商品は人間の口に入る食品、どこかの有名メーカー、有名老舗のような、ずさんな管理で商品を製造販売しないよう、くれぐれもお願いしたいものです。

「豆撒き」にも、「恵方巻き」にも関心が薄くなってしまった、現在の浪々の身(・・・というより、老々の身 hi)、バレンタインデーもホワイトデーも関係なく、ちょっぴりやるせない気分ですが、間もなく巡りくる「春分」、暖冬とはいえ、待ち望むところです。

そして「暑さ寒さも彼岸まで」などと、のんびりしたことを言っていないで、先に逝った多くの仲間を思い出し、その分も充実した毎日にしなければと思った1日でした。